空間・社会・地理思想 11号, 83-89頁, 2007年
Space, Society and Geographical Thought

社会・文化地理学における物質／問題

ベン・アンダーソン，ディヴィア・トリア = ケリー*
（森 正人 **訳）

Matter(s) in social and cultural geography
Ben Anderson and Divya Tolia-Kelly
Geororum 35, 2004：669-674

1. イントロダクション

近年の社会・文化地理学は，物質と唯物論を取り巻く多様な諸問題との新たな遭遇によって，活気づけられている。これは社会・文化地理学の再物質化を呼びかける多くの論考で取り上げられているとおりである（Jackson, 2000; Philo, 2000; Lees, 2002）。またこれは, おそらく少々異なった軌道では,「すべての事物が形成されたあとに残るがらくたを描き出すための，そして，いかに物質が配置されるか，あるいはいかに配置する傾向があるか熟考するための一連のイメージ」（Bennett, 2001, p.89）を展開する「物質の物質性（マテリアリティ）」の再想像でもある。それは，この主題的な問題がそこから現れ，それに寄与することを目的とする，広い，そして決して単純ではない文脈である。それは 2002 年 9 月にカリフォルニア大学の地理学デパートメントで 1 日開催された，

「物質の諸地理（マテリアル・ジオグラフィーズ）」と題された会議に基づいている。この会議は社会科学を横断する 18 の発表から成った。ここで公開する 6 つは，物質性のそれぞれの形式に対する新たな取り組みを可能にする，トピックの範囲を示している。すなわち，空間的・時間的に隔たった景観の記憶的な表象，音楽を聴いたり記録したりする身体，18 世紀の測量に関する政治的論争，補完的で代替的な医療の規則，デザインと日常的な消費財，中古衣服を取り巻く循環のネットワークがそれである。

これらの発表は,「物質の地理学」の深奥にまで入り込んでいる，ある働きの異質性を例証するために注意深く選択されていた。それぞれは，主に相異なる対象の種別的な物質性に関わっている。対象そしてそれと結びつけられた景観の概念を再考することは，今や，多様な唯物論者の伝統と出会う重要な場の一つである（Bingham, 1996; Cook and Crang, 1996; Jackson, 2000 を参照）。その他に，物質に対して働いている二つの主たる場がある。それは身体化の物性に関するフェミニストの研究（Longhurst, 2001; Rose, 2003）と，「人間世界以上」（Braun and Castree, 1998; Whatmore, 2002）のハイブリッドな構成体に共鳴し始めている一連の研究である。こうした多くの出会いにおける差異と類似性は，第一に物質もしくは物質性のあらゆる単純な基礎条件を審問に付す。無数の方向にねじ曲がる物質論的転回（回帰）に遭遇するために，主題的な問題は，種別性への異議申し立てとして読まれなければならない。本稿は，いくつかの新たな唯物主義の言説と，社会・文化地理学でますます重要になりつつある，物質の多様な形象への注意の喚起をさらに詳述しな

* Durham 大学
** 三重大学
Copyright from Elsevier

がら，先述の 6 つの発表の枠づけを目的とする。

2. 物体の不在？

経験的知識に基づいた理論的研究は，生気のない物質の領域と生き生きとした人間性との間の区分を切り結ぶ，多数の種別的な物質性の多様な地理を描き始めている（たとえば植生と庭園（Hitchings, 2003），肉体（Longhurst, 2001），景観（Wylie, 2002），サイバースペース（Bingham, 1996）に関する研究を参照）。この新たな感受性は，いかに空間と時間を徴づけ，時間と空間をより広範な一連の諸関係に綴じ込み，物質の過程的運動にしたがって変化するかを示し始めている。またそれは，どのように物質性それ自体が種別的な時間性と空間性を持っており，結果として事物の配置に対する初期の関心を示す客体フェティシズムを乗り越えてきたのか，注目する（Jackson, 2000）。今や社会・文化地理学を特徴づける物質と物質性に対する新たな反応は，ある部分では「文化論的転回」の偏向における「物質」の位置に対する強い不安からもたらされている（Mitchell, 1995; Thrift,1991 を参照）。この不安感は，「新しい」社会・文化地理学が文化の物質性を忘れ去ってしまったという想定へと強められている。たとえば Philo（2000, p.33）は，多様な非物質性への注意が「頑固なほどに存在している『物質』の世界にばったり出くわす」ことへ注目させなくしているという。物質に関する別の理解を目指す Jackson（2000, p.10）は，それにもかかわらず同じような文脈で，「物質文化を批判的に，つまり現代の社会・文化地理学に対する理論に基づいたアプローチにおいてとらえる」（強調は引用者）必要があることを強調する。これらの議論はともに，これまでの社会・文化地理学の伝統において物質は不在であったし，今もなおそうであるという前提に基づいている。こうした呼びかけと，根本的な問題は，「物質的なもの」と「文化的なもの」のより複雑なありようを展開する緊急性と避けがたさを共有している。でも，われわれが議論するように，この手の「脱-物質化」と「再-物質化」に関する議論が持つ目的論的な性質もまた，多面的な文化論的転回における物質の種別的な形式の存在を完全に書き出すために機能してきたのである。景観の文化唯物論の長い伝統を例に取ってみよう。景観は物質で触れることができ，人間文化の影響の証拠として長く理論化されてきた（Meinig, 1979; Sauer, 1963）。文化論的転回の効果は，人間主体と場所間の，そして他の人間主体と一連の物質的人工物との間の遭遇において意味は生産されるという想定に基づき，一連の「新たな物質」を暴き出すことにあった（Crouch, 2000, p.73）。それゆえ，景観研究をめぐって展開した表象の政治学は，ジェンダー（Rose, 1993），人種（Kinsman, 1995）に基づく排除の物質性に関わる問題を提起した。物質はその後，景観の居住性に関する新たな研究の多様な軌跡において，せめぎ合うようになってきた（「建てること」と「居住すること」への視角については Hinchliffe（2003））。それは決して単純に一括りにできないし，どちらか一方に置いておくこともできない。さらにその他にも，われわれが社会・文化地理学における物質と物質性に関する研究の容易ならざる現前と呼びうる例がある。たとえば，自然の物質性に関する研究をわれわれは目撃している（Fitzsimmons, 1989）。

それゆえ物質それ自体に代わって，われわれは文化論的展開が忘れ去っている物質が持つ二つの特定の配列について議論したい。第一は，物質と，自然科学においては多様な形を取りつつも今もなお支配的な，媒介されておらず静的な物性 physicality の間のおなじみの現実主義的均衡関係である。第二は「文化的なもの」を重層決定する明示的な社会構造に言及するための，「物質的なもの」あるいは「物質的条件」の使用である。しかし，これら二つの配列からの脱却は目的論的ではない。たとえば，社会的なもの，あるいは文化的なものの物質的基盤を再考する呼びかけが行われてきた（Mitchell, 1995）。さらに自然-文化の二分法に関する議論は，物質と「現実」を同一視し続けている（Castree, 2004）。忘れ去られてきた物質それ自体が単純ではないから，それはまた単純な「再-物質化された」社会・文化地理学となりえないし，それを望むべくもない（例えば Cook and Harrison（2003）と対照させること）。物質は「文化」への照準を犠牲にしたりあるいはそれに付け加えるなどして，簡単に「包み込まれる」単語で

はなく，多分に手に負えない単語である（「意味作用」「言説」「表象」「言語」「イデオロギー」など，どのように形象化されようとも）。しかしながら物質との新たな遭遇はまた，純粋な意味作用の領域としての「文化的なもの」の調和的な形象も問題にする。それゆえ，驚くべきことではないが，文化と物質の間の和解を要求する近年の研究のいくつかを，言葉と世界の区分で枠付けるということは，いくぶんか問題含みである。いくつかの例を挙げておけば，それは社会的有意性と物質的形態，言説と物体，言語と物質性，表象の様式と物性，意味作用と物質的不均等，言説的意味と物質的実践を含んでいる。

3. 諸問題

この課題での諸発表は，この「物質」と「文化」の分別に意義を挟むきわめて明確な一連の理論的源泉を検討あるいは例証することにより，物質に対する新たな感性に寄与している。それぞれは，文化唯物論，アクター-ネットワーク理論，非表象理論といった，社会科学や人文学を横断する物質や物質性への関心を活気づける，それぞれの思想の伝統を混ぜ合わせている（Pels et al., 2002 も参照）。とりわけ，全体的な課題は，それぞれの思想的伝統から連なる物質と物質性の間の差異を明らかにして見定めることである。その語の使用を問題にする差異は，実際の客体が持つ現実の物理性を排他的に参照するのに重要である（Kearnes, 2003）。これらの差異を引き出すために，われわれはそれぞれの発表がどのように物質の問題に取り組んでいたのか，コメントしておこう。

Divya Tolia-Kelly の「Materializing postcolonial geographies: examining the textual landscapes of migration in the south asian home」では，景観の価値の多彩さとイギリスに住むポストコロニアルの女性移民の関係を理解するために，写真と絵画が用いられた。故郷（ホーム）が持つ無数の視覚文化は，生きられた景観と所属のユートピア的景観を屈折させることによって，シニフィアンと換喩的装置として位置づけられる。そのようなものとして，それらは南アジアのアイデンティティ，モビリティ，記憶，そしてシチズンシップの多様な文化の環境的位置の諸様式を屈折させる，特別な権力の幾何学を表している。イギリスに位置づけられると，こうした諸文化は南アジア的な英国らしさの感覚に貢献する。この発表における物質の位置は，文化の形式との日常的な関わりからアイデンティティや現代的な市民権や文化ナショナリズムが立ち現れるプロセスを描き出す，文化唯物論の伝統にある。この物質のありようには，コロニアルとポストコロニアルがアイデンティフィケーションの関係的環境としての相互的な構成物となるような，一連の弁証法的アイデンティフィケーションが埋め込まれている。日常的な文化的物質を照準することにより，Tolia-Kelly は景観の経験をめぐるポストコロニアルな状況と，記憶や所属の身体化された配列への文化的物質の転換という，アイデンティティポリティクスを提示する。

Nicky Gregson と Vicky Beale の「Wardrobe matter: the sorting, displacement and circulation of women's clothing」は，ワードローブという物体が主体の位置と社会的諸関係を一瞬のうちにひだ付けるために多様なスピード，リズムで循環することを示している。ある特定の物質文化のタイプとしての衣服を分節化する中で，この発表は人びとと事物の関係を熟慮する中で影響的になってきている，物質文化の思想的伝統を利用し，またそれに貢献する（Miller, 1987）。これは，「なぜいくつかの事物は重要なのか」（Miller, 1998）に照準するために，アクターネットワーク理論が見せる関係的な唯物論のような，物体をよりラディカルな人間のポジションへと翻訳することを拒否している。Jackson（2000, p.13）が強調するように，強調点は「アプリオリに物質文化の物質性の重要性を想定するよりもむしろ，いつどこでそれらは差異を作るのか」にある。Gregson と Beale は「それ自体」の条件としてのダイナミズム，あるいは人間を作りあげるカテゴリー的に異なる意味の行為を前提すること避け，むしろ実践的な行為のリズムとルーティンを鋭く描き出すことによって，ワードローブという物質の動きを示している。衣服の移動と循環を調和させることにより，Gregson と Beale は，必然的に静的であるとか，より理解しにくい非物質的な文化の問題に比べれば比較的固定されているものとして物質文化を考える

傾向に対抗する。彼ら彼女らの発表はそれゆえに，「使用中の事物」（Appadurai, 1986）の社会生活に対する増大する関心を補う。

Dave Featherstone による「Spatial relations and the materialities of political conflict：the construction of entangled political identities in the London and Newcastle portstrikes of 1768」は，アクターネットワーク理論の「相対的唯物主義」と「ラディカルな民主主義理論」の対話を作り出す。この思想の伝統では，物質的に異種的なネットワークの内側から行為し産出する共-現前的な人工物の領域に，物体は類似している（Bingham, 1996; Hinchliffe, 1996）。アクターネットワーク理論は，世界を再び満たし，「しばしば新たな形式とは考えられてこなかった結びつき方で，その相異なる要素は互いに諸関係に引き込まれるために，運動，プロセス，継続的な世界の鼻歌」（Bingham and Thrift, 2000, p.281）に焦点を合わせる。Featherstone は，人間と事物の近代的な分断に関するラディカルな民主主義の再書き込みを問題にするために，アクターネットワーク理論の物質的異種性を利用する。重要なことに，彼はまた，論争の政治性を取り巻く対立の諸関係が人工物の有効性にとって重要であると議論することで，アクターネットワーク理論の相対的な唯物論を補うために，ラディカルな民主主義の研究を利用する。政治的論争の物質性は不安定である。それらはつねに滑らかで非問題的に組み込まれたり利用可能であったりするわけではない。この発表は，種別的な物質性が，対立的で，破壊的で，常軌を逸したネットワークに組み込まれているため，新たな行為の様式と政治的意識の形式の両方を作りうることを示している。

Neil Maycroft の「The objectness of everyday life: disburdenment or engagement?」はトースターや自転車などの日常的なもののデザインを例にしながら，客体の「内在的な特性」への注視に基づく使用価値の倫理を注意深く考えている。これは，近年ややもすれば無視される，主体と客体の相互関係に関する規範を作り出そうとするもう一つの批判的伝統を歓迎する。それゆえそれは，対象世界の現象性に関するマルクス主義的説明の中心を長く占めてきた，疎外と物象化の言語に経路を持つ規範的唯物論の典型である。Maycroft は「記号価値」に関心を持つポストモダンにおいては隠されてきた，使用価値の概念を問いただすことによって，この伝統を補っている。この発表は，地理学の読者にはおそらくあまりなじみのない，Donald Norman，Albert Borgmann，Ivan Illich といった一連のデザイン理論家を引き合いに出している。最終的には，関与と友好の明示的ではあるものの論争的でもある使用価値に基づいた，新しい主体-客体関係を助長することに関わる規範的プロジェクトとして，唯物論を鋳直す。Maycroft による使用価値の倫理を通しての議論は，価値判断を位置づけるものが，対象世界の奥深い地理の表層，そして不安の上で作用してきたという問題をはっきりと示す。

Marcus Doel and Jeremy Segrott は「Matterializing complementary and alternative medicine in the UK」で相互的でオルタナティブな医学の物質性を示している。彼らの発表は，「事物それ自体」としての CAM が，実はそのようには存在しないことを意味するために，実際に立ち現れる差異を探求している。その代わり，「単一の出来事」の過剰によって構成される「差異の諸世界」が存在するのである。Doel と Segrott は，近づけられたとき（そして拡張的な逆症療法によって）オルタナティブな相互的な医学を作り上げる諸物質の過剰の成立を目指す記述的エートスを通して，この純粋な差異の水準を示している。それゆえにこの発表は物質の性質をはっきりと描き出すのではなく，単純化できない種別性や無限の結合に調和させるために，ポスト構造主義的な禁止令にしたがう単純な唯物論のタイプを例証する。問題となるのは，どのように相補的でオルタナティブな医療が，動的な物質化のプロセスを通して形成されるかということだ。結果，物体や単一性についての一連の多様なポスト構造主義の思想家たちを想起する，差異としての反復という原理に基づく物質の形象が提示される。これは物質と形式を持たない大衆との間の均衡を解体にする。それはまた，ポスト構造主義が生命を言語に換言し，それゆえ物体を忘れ去ってしまったという軽薄な主張に対抗している。そうではなく，Doel と Segrott の言葉で言えば，物質は「単純に生じる。それが全てだ」。

Ben Anderson による「Time stilled-space slowed: how boredom matters」は，物質の相異なる有り様と社会的・文化的生活の非合理的次元の関係をとらえるために，退屈さの地理を描き出す。この発表は，非物質性の次元とは，退屈する身体，活気づかせる歌，あるいは退屈さからの喜びに満ちた脱出といった事柄が，まさに物質性の対極にあるのではない，ということを跡づける。それゆえそれは，情動の概念に取り組む非表象理論を近年生き生きと描き出している，非物質性の問題を考え抜く試みの一つになっている。結果としての情動的な物質性の形態の研究は，物体に対する「歌詞」の感覚に基づく魅惑の物質性を発展させようとする近年の研究と類似している（Bennett, 2001; Thrift, 2004）。しかし，過剰あるいは余剰の存在論が，損失あるいは有限性の実在を含む必要があることを議論するために，時間-空間を静止させたり流れをゆるめたりする退屈さとして立ち現れる沈静化の例を用いる中で，それはそうした研究から区分される。そうした結果として生じる，つねに「まだ何かになりえない」ものとしての物体の理論的-経験的形象は，「喜びと悲しみ，増加と減少，明るくすることと暗くすること」（Delueze, 1998. p.145）から成る，情動的な「非-地 non-ground」というスピノザ的なイメージと類似している。

六つの発表は，陰に陽に「物質」の多様な形状を節合している。意味に満ちた物性，物質文化，共現前する人工物の領域，固有の所有物をともなう客体，一連の動的な特異性，そして情動的な非-地として。それゆえ物体そして物質性が文化論的転回のねじれにおいて出会うことになる，一連の生産的な逸脱がますます存在するようになってきた。諸発表は不活性な空白としての物質の形状，あるいはプロセスへの焦点に賛成する基本的な外観から脱出するという点で結びつけられるのであり，それによって物質性は種別的な収容力と効果を勝ち取る。何が物体の本質であるかではなく，それが何をなすかへの幅広い照準は，言い換えれば物体の基礎はすでに-つねに「能力において in potentia」与えられていない。まさに物質の新たな審問というこの転回の見所は，物体の開放性に調和し，それゆえに社会的もしくは文化的なるものから乖離した，差異化されない外部性として，物体を語ることを拒否する概念の展開にある。

4. 唯物論

これらの差異を考えれば，「物体」や「物質」への単純な「回帰」はあり得ない。いくつもの発表は，社会・文化地理学がますます相異なる「唯物論者」の理論的・経験的研究の形式を提供する新たな唯物論の量産によって特徴付けられる。それぞれの発表が例証し，またはっきりと描き出したいくつもの唯物論は，すべて，主体/客体関係，そしてその関係が一連の多様なプロセスを構成する，より広範で過剰な水準から現れることに関する，きわめて相異なる前提を示している。それゆえ，これらの唯物論の間の差異は，われわれがただここで言外にほのめかしたいと望む一連の中心線を横断する。つまり，主体-客体関係の親密性をどう考えればいいのか，あるいはどのようにして人間と非人間の間に活発さが配分され，その後にどのようにしてエージェンシーと権力の配置は理解されるべきなのかを。ここで記しておくべきことは，これらは「物質の地理」の広範な領野を活気づける問題のまさにいくつかであるということだ。このような差異の思考の意味を例証するのは，活気ある軸を考えることになる。つまりそれは，政治的実践の対比と政治学の定義であり，物体の相異なる形象はそれに役立つことになる。このことは，物質の研究に対する核心的な問題である。再-物質化の戦略は，自動的に政治と経済の「物質的実在」に注目する，より基礎付けられた姿勢をもたらす，と前提する傾向が存在してきた（McEwan, 2003 を参照）。これは審美性や非物質に対して社会・文化地理学が感じてきた関心と相対的である。しかし物体の形状によってもたらされる厳格な差異は，「脱-物質化」が「脱-政治化」と一致することへの幅広い懸念の中で，控えめに論じられてきた（Barnett, 1998; Gregson, 1995）。しかしながら，われわれがここまで論じてきたように，物体は現実の実体に問題なく言及しながら機能することはできないから，政治と物質の形象の結びつきはより複雑なのである。たとえば史的唯物論の伝統からすれば，物質への取

り組みは，社会的なものの構造のただ中で文化の物質を位置づけることに基づいた，変容する実践の政治学を示している（Mitchell, 2000 を参照）。それゆえ，理論的研究の唯物主義者的形式に再び出会うことは，権力の諸関係が生きられ経験される「物質的な方法」の理解にとって欠かせない。この伝統，そしてそれに関わる文化唯物論の伝統からすれば，物体への同調は，包含と再生の実践的応用が，不平等と排除の人間の地理に基礎付けられることを可能にする。しかし，また別の，社会・文化地理学でますます増殖するよりポスト-人間主義的あるいは近代 amodern 的な物体の翻訳を考えてみよ。Bruno Latour（1993）のよく知られた「諸事物の議会」というイメージは，「単なる事物」が「政治的なるもの」に介入し調節するかもしれないことを考えることを要請する。知的な系統と結びついたものでいえば，Bennett（2001, p.162）の「魅惑の唯物論」の想像力に富んだ展開は，「人間の系統が，力強く，突飛で，あふれんばかりの物質世界の上への写真 onto-picture によって強められうるという可能性の」試みによって，物質の「開かれた」次元に取り組もうとしている [1]。それゆえに，相異なる諸実践は，独特の政治的領野が「人間世界以上」において，人間の特異性の概念に基づく必要がない，あるいは基づくべきではないという主張にますます沿っている（Whatmore, 2002 を参照）。

このような仕方で，そして別の仕方で，物質性を下支えする物体 matter の形状は重要になる。われわれが強調しておきたいのは，それは，政治的実践をきっぱりと決定するのではなく，最終的には調査において別の結果が生じるように向かう特定の傾向を提供することである。もちろん，政治的実践を乗り越える別の差異も存在する。強調すべきことは，それは「物体」に対する特定の「見方」，あるいは特異な「唯物論」について議論しないことを，この課題の多様性は意味しているということだ。はっきりと，もしくは事例を通して，それぞれの発表（われわれ自身のものを含む）はそれを行っている。しかしながら，おそらく文化への照準において失われた，物体の単純なイメージへの回帰を，それはまさに拒絶している。むしろこの課題は，問題となっている場所の物質への回帰の潜在性と連動する新たな形でもって，ある試みを後押ししようというものである。それゆえ，よりはっきりとした「物体の物質性」への同調を活気づけてきたし，またこれからも活気づけるであろう，相異なる道筋のいくつかを開示する新たな潜在性と可能性の地図として，それは機能している（Vattimo, 1998）。このただし書きを前提とするなら，物質的転回への単一の方向性が存在しないことを，最後に心にとどめておくべきであろう。無数の入り口と出口を持っているにもかかわらず，それは感受性と感応性によってのみ多様な（非）物質的物体と結びつけられる。それこそが，この課題を突破する重要課題/物質なのである。

謝辞（省略）

注

Bennett（2001, p.15）は造語の「onto-picture」を「人間存在と世界の基礎的な特性に対する主張が本質的に論争的であるとしても，そうした一連の主張」を提示する存在論に言及するために用いている。

参考文献

Appadurai A (Ed), 1986, The Social Life of Things Urmeisitv of Chii. igo Press Chicigo.

Barnett C, 1998, The cultural turn: fashion or progress in human geography, Antipode 10(4) 179-394

Bentiett J, 2001, The Enchantment of Modern Life: Attachments Crossings and Ethics. Princeton University Press Princeton and Oxford

Bmgham, N, 1996, Object-ions trom technological determinism: towards geographies of relations. Environment and Planning D: Society and Spate 14 63-S-657

Bingham N, Thrift N, 2000, Some new instructions for travellers the geography of Bruno Latour and Michel Serres. In Crang M, Thrift N (Eds) Thinking Space. Routledge, London and New York pp 281-102

Braun B, Castree N (Eds), 1998, Remaking Reality: Nature at the Millennium. Routledge, London

Castree N, 2004, Nature is dead! Long live nature!. Environment and Planning A 36, 191-194

Cook I, Crang P, 1996, The world on a plate: culinary cultures displacement and geographical knowledges. Journal of Material Culture 1, 131-145

Cook I, Harrison M, 2001, Cross over food le materializing postcolonial geographies. Transactions of the Institute of British Geographers 28, 297-117

Crouch D, 2000, Introduction Part II: Popular culture and cultural texts. In Cook I, Crouch D, Naylor S, Ryan J (Eds), Cultural Turns/Geographical Tunis Pearson Education. Harlow, pp 69-74

Deleuze G, 1998, Essays Critical and Clinical. Verso London.

Fitzsimmons M, 1989, The matter of nature. Antipode 21 (2) , 106-120

Gregson N, 1995, And now it's all consumption!. Progress m Human Geography 19, 135-144

Hinchliffe S, 1996, Technology power and spice—the means and ends of geographies of technology. Environment and Planning D: Society and Space 14, 659-682

Hinchliffe S, 2001, Inhabiting —landscapes and natures. In: Anderson K, Domosh M, Pile S, Thrift N (Eds) , Handbook of Cultural Geography. Sage, London, pp. 207-227

Hitchings R, 2003, People plants and performance on actor network theory and the material pleasures of the private garden. Social and Cultural Geography 4 (1), 99-115.

Jackson P, 2000, Rematerializmg social and cultural geography. Social and Cultural Geography 1, 9-14.

Kearnesi M, 2003, Geographies that matter — the rhetorical deployment of physicality?. Social and Cultural Geography 4 (2), 139-152

Kingimn P, 1995, Landscape race and national identity the photography of Ingrid Pollard. Area 27, 300-310

Latour B, 1993, We Have Never Been Modern. Harvard University Press, London.

Longhurst R, 2001, Bodies Exploring Fluid Boundaries. Routledge: London.

Lees L, 2002, Rematenalizmg geogr iphv the new urban geography Progress in Human Geography 26 (1) 101-112

McEwan C, 2001, Material geographies and postcolonialism. Singapore Journal of Tropical Geography 24 (3), 340-355.

Meinig D, 1979, Reading the landscape an appreciation of W G Hoiskins and J B Jackson. In: Meimg D (Ed), The Interpretation of Ordinary Landscapes. Oxford University Press, New York

Miller D, 1987, Material Culture and Mass Consumption Blackwell Oxford

Miller D, 1995, Why some things matter In Miller D (Ed), Material Culture Why Some Things Matter. University of Chicago Press, London, pp 1-21

Mitchell D, 1995, There s no such thing as culture towards a reconceptualization of the idea of culture m geography. Transactions of the Institute of British Geographers 20, 102-1I6.

Mitchell, D., 2000. Cultural Geography: A Critical Introduction. Blackwell, Oxford.

Pels, D., Hetherington, K., Vandenberghe, F., 2002. The status of the object: performances, mediations, and techniques. Theory, Culture and Society 19 (5/6), 1-21.

Philo, C, 2000. More words, more worlds: reflections on the culturalturn and human geography. In: Cook, I., Crouch, D., Naylor, S., Ryan, J. (Eds), Cultural Turns/Geographical Turns: Perspectives on Cultural Geography. Pearson Education, Harlow, pp. 26-53.

Rose, G., 1993. Feminism and Geography. Sage, London.

Rose, G., 2003. A body of questions. In: Pryke, M., Rose, G. Whatmore, S. (Eds.), Using Social Theory: Thinking Through Research. Sage, London, pp. 47-65.

Sauer, C, 1963. The morphology of landscape. In: Leighly, J. (Ed.), Land and Life. University of California Press, California, pp. 315-351.

Thrift, N., 1991. Over-wordy worlds? In: Philo, (Ed.), New Words, New Worlds: Reconceptualising Social and Cultural Geography. Conference Proceedings. Cambrian, Aberystwyth, pp. 144-148.

Thrift, N., 2004. Performativity: a geography of unknown lands. In: Duncan, J., Johnson, N., Schein, R. (Eds.), A Companion to Cultural Geography. Blackwell, London, pp. 121-136.

Vattimo, G., 1998. Matiere et Philosophic: Editions du Centre Pompidou.

Whatmore, S., 2002. Hybrid Geographies. Sage, London.

Wylie, J. 2002 An essay on ascending Glaastonbury Tor. Geoforum 33, 441-454.

邦訳を示していないので，各自で確認されたい。